平成26年6月2日　日本経済新聞　朝刊20面
※日本経済新聞社の許可を得て掲載しております。無断で複製・転載することを禁じます。

「新入生が休学し自主活動」東大が新制度

大学入学直後に休学して国内外で多様な活動を体験する東京大学のFLYプログラムの第1期生が、1年間の活動を終えてキャンパスに帰ってきた。浜田純一学長に、プログラムの成果について寄稿してもらった。

浜田　純一
東京大学学長

本物に触れ 個性磨く

「異質」受け止める素養 ■ 失敗恐れなく

「初年次長期自主活動プログラム」という制度が、東京大学で動き始めた。FLYプログラムと呼んでいる。「飛び立て」プログラムということになるが、「Freshers' Leave Year Program」の略称である。日本版ギャップイヤーといってよいかもしれない。

文部科学省や産業界、非営利団体（NPO）からも後援を受けて昨年4月にスタートしたこの制度は、大学に入学した直後の学部学生が、申請して1年の特別休学期間を取得する。その期間に東京大学以外の場で、ボランティア活動や就業体験活動、国際交流活動などを行い、それらを通じて自分を成長させていく自己教育の仕組みだ。

□ □ □

先日、このプログラムを修了してキャンパスに戻ってきた11人の第1期生が報告会を行った。居並ぶ彼ら彼女らから受けた強い印象は、1年の時を経て、一人ひとりの顔立ちが、つまり個性が、とてもはっきりしたということだった。

学生たちの多くが海外に出ていく中で、東日本大震災の被災地で活動した者もいる。その1人は、ずっと釜石で復興と街づくりに走り回っていた。社会の多様さと複雑さに初めて深くかかわった経験を通じて、「とりあえずやってみる」ことが習慣化したと記している。

学生たちは、驚くほど共通した姿勢を体得している。多様な文化や生活に触れて異なったものを受け止める感覚を身につけたこと、改めて日本や日本文化への自覚・興味が生まれたこと、あるいは、自分に自信を持ったこと、失敗することを恐れなくなったこと、さらに自分の意見をはっきり述べることなどである。まさに、このプログラムが期待していたものだ。

少なからぬ学生が、この期間に語学力を鍛えることも目標にしていた。ただ、普通に英語圏で過ごしたという学生は少ない。活動場所にカナダのトロントやオーストラリアのシドニーを選んだ学生たちの理由は、その都市が持つ人種・国籍・文化の多様さである。別の学生はインドのデリーを選んだ。欧米や日本とはまったく異なる文化の場だったからだという。

FLYプログラムの1期生11人が1年間の活動を報告、浜田学長から修了証を交付された（5月9日、駒場キャンパス）

芸術的素養を深めようと、20余りのヨーロッパの都市を旅した学生もいた。各地でコンサートなどを鑑賞し美術館を訪れるなど、観光旅行を続けていたようにも見える。しかし、この学生もとても大切な経験をした。それは、「本物に触れる」ということだ。

FLYプログラムは、学生たちが多様性に出会うことを期待しているが、それは同時に、「本物に触れる」ことでもある。本物とは、生の芸術文化であり学問に没頭する人の姿であり、あるいは人々の実際の生活であり、被災地の現実である。

学生たちは長い受験勉強を通じて、知識としてはたくさんのものを持っている。頭の中で概念や論理を積み上げていく訓練も大切だ。しかし、知識と現実の本物とが重なり合う経験をする時に、個人の能力も感性も大きく飛躍する。歴史的建造物にじかに手を触れた感動を語った学生の言葉も忘れられない。期間の大半を哲学論文の執筆に費やした学生もいる。彼の物理的な移動距離はさほど大きくないが、思考の旅の移動距離は大きい。

このような第1期生のチャレンジが教えてくれるのは、1年という「ギャップ」期間の使い方が実に多彩だということだ。つい、ボランティアやインターン、留学などというカテゴリーで枠づけしがちだが、私たちの想像を超える豊かな生かし方を、学生たちは自分で考え実行している。学生たちが身をもって示したそうしたポテンシャルは、この社会の未来に大きな希望となるだろう。

□ □ □

東京大学で秋入学を検討してきた過程で出された消極論の理由の一つに、春の高校卒業から秋の大学入学までの半年間を、18歳の学生が有効に使えるのか、という指摘があった。それに答えるエビデンスを、この学生たちは提示してくれた。

もちろん、すべての学生が同じような活動をすぐにできるわけではないだろう。そこには、初等中等教育や家庭教育の課題も出てくる。ただ、学生たちが素直に驚きをもって報告していたように、18歳を責任ある大人として扱う国は珍しくない。若者が持つポテンシャルはもっと信頼され、もっと期待されてよい。

東京大学がグローバル化の時代に向き合う教育改革を、まず4ターム（学期）制の実施から始めようとすると、秋入学はもう無理かと簡単にあきらめる人たちも少なくない。だがそれは、社会として情けない。むしろ一人ひとりのタフな取り組み、一つ一つの積み重ねが、時代を着実に前へと動かしていく。東京大学で進めている「国際化」「実質化」「高度化」を柱とした学部教育の総合的な改革は、まさにそのようなものである。

その過程で制度も人も確実に変化していく。教育改革とは大学の仕組みや組織が変わることだけではない。何よりも学生が変わることだ。そして、その学生を受け止める社会が変わることだ。FLYプログラムに参加した学生たちの報告を聞いていて、その確かな変化の兆しを感じる。